

名古屋大学

NUA
archives
university
nagoya

大学文書資料室ニュース

Nagoya University Archives News 第19号 2005.9

目次
Contents

大学文書資料室の拡充構想とその展望（理事・副総長 山下廣順）	—	2
阪大アーカイブズ設置委員が大学文書資料室を視察	—————	3
ふたたび陽の目をみた名帝大キャンパス構想模型	—————	4
資料室だより	—————	6
資料室日誌（抄）	—————	7
平野総長が講義、「これからの名大」を語る	—————	8



名帝大キャンパス構想模型（田村模型）（4～5頁参照）

大学文書資料室の拡充構想とその展望

名古屋大学理事 副総長 山下 廣順

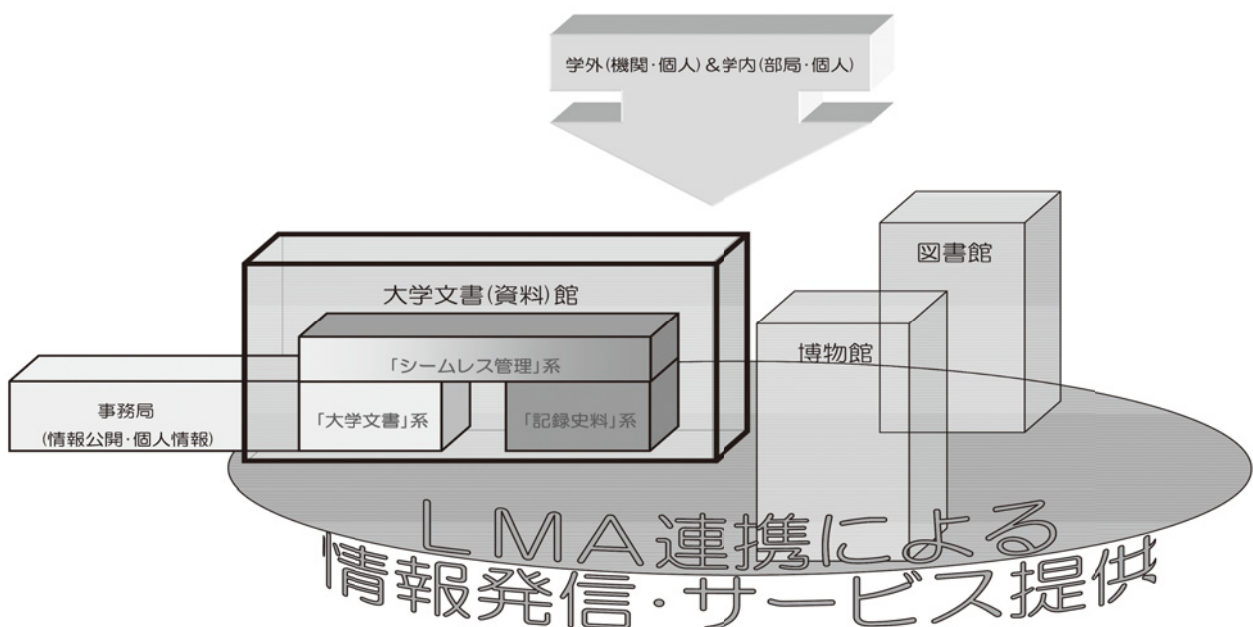
法人化後2年間で名古屋大学の運営組織・体制を再編・整備することが大きな課題となっており、その中で、将来構想のもとに大学文書資料室を整備・拡充することを考えていかねばならない。現在は、本部別館（旧名古屋工事事務所）に340㎡の部屋を確保し、加藤室長（兼任教授）のもとに室員（専任助手2名）、事務職員（専門職員1名、事務補佐員3名）の人員で活動を続けている。歴史資料と大学文書を一元的に管理する役割を担う大学文書資料室は、図書館、博物館と並ぶ、「大学アーカイブズ」へと発展していくことが望まれている。

大学文書資料室は、法人化とともに大学史資料室を改組して、2004年4月に設置された。これまでの主な活動としては、名古屋大学の歴史資料を事項別に取りまとめた名大史ブックレットを、2000年12月に創刊以来すでに10巻まで刊行した。全学同窓会総会、東京フォーラム、関西フォーラム等でパネル展示をするとともに、参加者に配布され、好評を博している。名大トピックスの裏表紙には、学内外にある名古屋大学の歴史に関する記念物等を紹介した「ちょっと名大史」が本年8月までに40回にわたって連載され、随時

冊子にまとめられている。豊田講堂の地下倉庫から発見された名古屋（帝国）大学創設時のキャンパス構想の立体模型（田村模型）を修復し、来る10月23日の名古屋大学ホームcomingデーで公開されることになっている。このように、大学の情報公開という観点からも重要な役割を果たしている。また、全学教養科目として「名大の歴史をたどる」と「情報公開と文書資料—文書の世界を歩く」を開講し、全学教育にも貢献している。



大学の組織活動に伴って発生する大量の文書を、専門家の目で評価選別して、半現用記録、非現用記録、記録史料として管理する「シームレス型記録管理システム」の構築を進めている。それには、情報処理システムの開発とともに、中間保管庫の確保が必要となっている。大学文書資料室は、このような大学の共通基盤業務として重要であるのみならず、記録史料を調査研究する記録史料学としての学術研究として捉える必要があり、人材の育成も進めていかねばならない。



大学文書資料室の拡充構想概念図

大学文書資料室の活動を発展させ、拡充するためには、財政的・人的・物的支援が必要である。大学の運営に関わる共通基盤組織は、教員定員の5%枠を活用して、総長の裁量で措置できることになり、これまでに設置されてきた室に加えて、新たな支援組織の創設が検討されている。その中で、人的措置を考えることになる。大量の資料を収納するには、スペースもまだ不足しており、全学の施設の状態を把握しながら、必要なものには割り当てをする。予算に関しては、経費の節減を図り、重点的な再配分を考える必要がある。外部資金の獲得も重要であり、当事者の努力が問われる。八高会から奨学寄附金をいただいたのもその現れであり、give and takeをベースにした共同研究（共同作業）を進める必要がある。また、学術研究としての成果をもとに、科研費等への積極的な申請を今後も進めるべきである。このような努力をもとに、拡充を考えるべきであろう。図書館、博物館との役割分担、

全学的な学術情報基盤の連携システムの強化の中で、業務の効率化を図り、大学文書資料室の将来構想をもとに、大学の支援方策を検討していくべきである。主要な国立大学においても、その重要性に鑑み、「大学史料館」、「大学文書館」等として拡充・整備がここ数年急速に進められている。

国立大学の法人化による大学改革は、大きな試練であるとともに、閉ざされ、保護され、親方日の丸であった大学を、自らの目で見直し、自らの手で作り上げていく好機であり、法人化後の大学像を前向きに捜し求めていくことである。大学の発展を図るためには、同窓生を始めとする社会からの支援が不可欠である。そのためには、大学の特色をアピールする情報を提供し、自ら社会に対して貢献をすることが重要である。大学文書資料室は、このような大学の将来の発展にとって重要な役割を果たすものであり、これまでの活動実績を踏まえて、一層の充実を図りたいと考えている。

阪大アーカイブズ設置委員が 大学文書資料室を視察

8月27日、大阪大学から、則末尚志教授（総合計画室員）と江口太郎教授（総合学術博物館長）が大学文書資料室に来室されました。お二人は、このたび阪大に設置された、総合計画室文書館（仮称）設置検討ワーキング委員です。阪大のアーカイブズ組織の立ち上げに向けて、大学アーカイブズの先行事例の調査のため、本室への訪問となりました。

来室前、二教授は本部にて大学文書資料室協議委員会委員長である山下廣順理事と会見し、阪大と名大のアーカイブズのあり方などについて意見を交換されました。また山下理事は二教授と同じ阪大理学部にかつて在籍していたこともあって、当時の思い出話もまじえての歓談となりました。

次に場所を本部別館の大学文書資料室に移し、加藤鉦治室長以下のスタッフが二教授の調査に対応しました。事前の調査希望事項にしたがって、本室の設置目的、設置経緯、関係規程、組織、施設、業務内容、博物館・図書館などとの関係、予算面などの全学的位置づけなどについて一通り説明した後、それぞれの項目について、二教授からさらに具体的な質問がありまし

た。その後、本室の施設を案内し、2時間ほどで視察は終わりました。

これで阪大に文書館が設置されれば、名大と東大を除く旧帝大は全て文書「館」を持つことになります。大学経営におけるアーカイブズの役割は、法人化後ますます重要なものとなっていくものと考えられています。当室も学内の理解を得ながら、ますますその充実をはかりたいと思います。



山下理事と会談する則末(右)・江口(左)両教授

ふたたび陽の目をみた 名帝大キャンパス構想模型（田村模型）

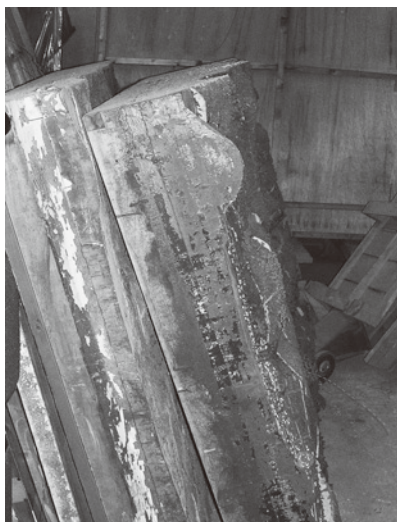
今年2月、大学文書資料室は、豊田講堂地階倉庫の奥から、歴史的な2つの模型を発見しました。

これらの模型は、1939（昭和14）年に名古屋帝国大学（名帝大）が創設された直後、1940年から41年にかけて、当時の田村春吉（たむら・はるきち）医学部長によって製作されたものです。戦後、何らかの理由で所在が不明となり、文献でしか存在が確認できない「幻の田村模型」と呼ばれるようになっていました。

いずれも、現在の東山キャンパスから本山、東山動植物園方面にかけての一带を、1/1000スケールで模型化したものです。表面は、両方ともタテ139.5cm×横182cmと同じですが、厚さは35cmと20cmと、かなり異なっています。これは、厚い方は高低差のみを10倍に強調して、1/100にしてあるからです（本ニュース表紙の写真を参照）。

今回、大学文書資料室では、専門の業者に依頼してこれらの模型をクリーニングし、移動式木製展示ケースに収納しました。さらに、劣化防止のため、ケースには温湿度調整装置や紫外線をカットするガラスを取り付けました。一方で、修復は極力ひかえ、損傷が著しくどうしても必要な部分のみとしました。

大学が古い時代のキャンパス模型を展示している例はありますが、それらは当時の状況を再現してはい



発見時の状態
(左側が完全な1/1000模型で、右側が高さのみを1/100に変更したもの)

るものの、現在の大学が製作したものです。対してこの「田村模型」は、大きさや見た目の壮麗さなどでは及びませんが、その当時の大学によって作られた歴史的な文化財でもあるという大きな特徴を持っています。そのため、できるだ



クリーニング作業

け手を加えず、製作当時に近い状態を再現することを重視しました。

またこの模型は、名古屋帝国大学の創設からその後の将来構想に情熱を傾けた、製作者の田村春吉の強い意志を体現したのもでもあります。通称を「田村模型」とするゆえんです。

田村春吉(1883-1949)は、東京帝国大学医科大学(現東京大学医学部)を卒業後、1916(大正5)年に愛知県立医学専門学校教授となり、同校が県立愛知医科大学をへて官立名古屋医科大学となった翌1932年、学長に就任します。

それからの田村は、名古屋に名医大を母体とする総合大学を創設することに熱意を燃やし、地元の政財界のみならず文部大臣にもはたらきかけるなど、精力的な運動を展開しました。そのかいあり、当時全国第3位の人口を擁する大都市として急成長を遂げていた名古屋市に帝国大学を、との気運が盛り上がりました。その後もかなりの紆余曲折はありましたが、田村は地元の学界の代表として、名古屋帝国大学の創設に中心的な役割を果たしました。

こうした経緯から、田村こそ名帝大初代総長との呼び声も小さくありませんでしたが、結局文部省の人選により、元東京帝国大学工学部長の渋沢元治が任命されました。

そして、初代医学部長に就任した田村が取り組んだのが、鶴舞の医学部を、理工学部のある広大な東山キャン

ンパスに移転させようとする計画でした。この「田村模型」は、この計画をプランニングするために作られたのです。名大史上最初の東山キャンパス模型ともいえるでしょう。

田村は、早くも1939年にはこの模型を島津製作所に依頼して製作することを公表し、翌40年には本格的に着手しました。最初にできたのが、タテ横・高低ともに1/1000の模型でしたが、これでは地形の凹凸が今一つ実感できないので、さらに追加して作らせたのが、高低差を10倍に強調したものでした。したがって、田村が実際に使ったのはこの追加模型であり、最初の模型の一部をはぎとった跡は、追加模型に流用したものと考えられます。追加模型に比べ、最初の模型の損傷が激しいのはそのためでしょう。

追加模型でみると、左端上部の、当時は市電が走っていた東山通り、左上部の東山動植物園、中央やや左下部の鏡ヶ池のほか、民家、街路樹などが再現されています。軍による地図に加えて、田村自らも参加したという実地踏査の資料にもよったといえますし、当時の状況がかなり忠実に再現されていると考えられます。

しかしその一方で、当時実際にはなかった重要なものも組み込まれていました。それは、模型の中央やや上を、左右に走る太い道路です。これこそ田村の医学部移転構想の骨子を示すものでした。即ちこの道路は、建設が構想された医学部諸施設の中央を通っていました（だいたい現在の本部別館と硬式テニスコートを結ぶ線になります）。附属病院を持つ医学部は、患者の便のためにも、交通の要路と直結すべきであるという考え方にもとづいたものといわれています。

医学部を東山へ移転するという計画は、渋沢総長が中心になって進められた計画と、この田村構想の2つの流れがあったことが知られています。しかしこの田村構想の方は、簡単なキャンパス図面が1枚見つかつ



追加模型の東山動植物園



模型に貼り付けられた「島津製作所模型部製作」のプレート

ているのみで、その全体像は不明なままでした。今回の模型は、これを具体的に示すものとして重要なものです。さらに、渋沢総長の計画には見られない、東山通り方面をも視野に入れたスケールの大きさも注目されます。

この田村構想は、土地買収に必要な資金難や戦争の激化により、結局実現しませんでした。そして戦後の名（帝）大でも、敗戦の混乱の中、キャンパスの集中はなかなか実現せず、1960年代まで施設が各地に分散する「タコ足大学」の状態が続くことになりました。

1946年1月、第2代総長に就任した田村は、キャンパスの集中ではなく、学部の増設により総合大学の実を上げようとしていました。田村はその実現を見ることなく現職のまま亡くなりましたが、名大が6学部（医・工・理・文・法経・教）をそろえた新制大学として再出発したのはその成果です。

大学文書資料室では、平成17年度全学年度計画にある、「大学文書資料室を中心として（中略）記録史料の収集・保存及び活用を積極的に行い、本学の歴史情報の公開を進める」に基づき、この「田村模型」を研究・教育などに広く活用していきたいと考えています。

研究面では、この模型を草創期の名大史のみならず、地域史において重要な意義を持つ学術史料として位置づけ、分析を進めていく方針です。

教育面においても、資料室は中期目標の「教育内容に関する目標」に「自校史教育」を掲げ、独自の教材を開発しながらそれを積極的に推進することをうたっています。この模型は、資料室が開講している全学教養科目「名大の歴史をたどる」において絶好の教材となるでしょう。

その他、この模型は『中日新聞』3月26日夕刊にも報道されたように社会の注目度も高く、本学のみならず一般にも公開することによって、地域への歴史情報の提供という、広い意味での社会貢献にもつなげていきたいと考えています。

資料室だより

- 『名大史ブックレット』第10巻と『保存資料目録』第5集を刊行しました
- 『名大史ブックレット』全巻の電子ブック版をWeb公開しました

今年3月、大学文書資料室では、『名大史ブックレット』第10巻と『名古屋大学大学文書資料室保存資料目録』第5集を刊行しました。

ブックレットでは、新制名古屋大学の包括学校シリーズの2冊目として、名古屋高等商業学校をとりあげました。1920（大正9）年に創設された名古屋高等商業学校（名高商）は、名大経済学部の前身にあたる官立旧制専門学校です。また、初代校長渡辺龍聖を中心に、特色ある教育・研究が行われていました。本書は、この名高商の30年の歴史を、産業都市として急激な発展をとげた戦前の名古屋市とのかかわりを見ながら、分かりやすくまとめたものです。

保存資料目録第5集は、昨年3月刊行の第4集で、2002年3月までに大学文書資料室が受け入れた公開資料の収録が完了したことをうけ、2002年4月から2003年3月までの1年間に資料室が受け入れた全公開資料約1,800点を掲載しました。収録の中心になっているのは、2002年度に名大が刊行した印刷物などの資料で、各部局別に掲載し、その中でさらに事項別の分類がしてあります。

上記の刊行物をご希望の方は、裏表紙の連絡先まで郵便、FAX、E-mailでお申込みください。また既刊のブックレット第1～9巻、『保存資料目録』第3～4集（第1～2集は在庫切れ）、『スケッチ名大史』、『ちょっと名大史』増補版なども無償で配布しております。こちらについてもご連絡をお待ちしています（郵送料はご負担いただきます）。

また、このたび名大史ブックレットは、本部総務企画部総務広報課の協力をえて、名大および大学文書資料室のHPから、全巻が電子ブックやPDFデータとして閲覧できるようになりましたので、こちらも御利用ください。



資料室日誌（抄）

- 2月10日 堀田慎一郎室員、総長裁量経費による緊急資料保存対策プロジェクト第2回会議に出席。
- 2月15日 杉浦昌弘名誉教授より資料受贈。
山口拓史室員、堀田室員、核融合科学研究所核融合アーカイブ室発足記念講演会に出席。
- 2月23日 加藤鉦治室長、村地俊二日本赤十字豊田看護大学学長を訪問し、名大史関係資料などについて面談。
- 2月24日 塩野谷恵彦名誉教授、資料の撮影のため来室。
- 3月1日 舟橋重信教授より資料受贈（3月25日にも受贈）。
- 3月11日 第4回大学文書資料室運営委員会を開催。
卒業生大橋郁夫氏より資料受贈。
- 3月15日 第3回大学文書資料室協議委員会を開催。
- 3月18日 定年退職者へ資料寄贈案内を送付。
- 3月28日 内山晉名誉教授、資料寄贈のため来室。
堀田室員、資料収集のため国立国会図書館に出張（～29日）。
- 3月30日 加藤室長、山口室員、堀田室員、八高会常務理事赤津敏氏宅を訪問し、資料を受贈。
山口室員、堀田室員、卒業生手塚哲氏宅を訪問し資料を受贈。
- 3月31日 『名古屋大学大学文書資料室紀要』第13号、『名大史ブックレット』第10巻、『名古屋大学大学文書資料室保存資料目録』第5集、『名古屋大学大学文書資料室ニュース』第18号刊行。
井原俊輔教授より資料受贈。大谷肇助教授資料寄贈のため来室。
- 4月6日 森正夫名誉教授より資料受贈。
- 4月7日 宮田正名誉教授より資料受贈。
- 4月12日 全学教養科目「名大の歴史をたどる」開講。
- 4月23日 山口室員、堀田室員、日本アーカイブズ学会に出席のため学習院大学に出張（～24日）。
- 5月11日 加藤室長、日本外科学会定期学術集会における特別企画展示「名古屋大学医学部第一外科のあゆみ」を見学（堀田室員、13日見学）。
- 5月13日 第5回大学文書資料室運営委員会開催。
- 5月17日 第4回大学文書資料室協議委員会開催。
- 5月23日 山口室員、堀田室員、手塚哲氏宅を訪問し資料受贈。
堀田室員、名大附属図書館医学部分館医学部史料室を視察・調査。
- 5月24日 山口室員、堀田室員、総長裁量経費による大学所蔵学術資産の保存対策プロジェクト第1回会議に出席。
山口室員、「大人数対象の全学教養科目の開講に向けての研究会」に出席。
- 5月25日 水田洋名誉教授より資料受贈。（6月6日にも受贈）。
- 6月1日 大学文書資料室の新パンフレット（Zカード）発行。
- 6月6日 岡崎南病院整形外科部長柴田義守氏夫妻、資料寄贈につき協議のため来室。
- 6月7日 全学教養科目「名大の歴史をたどる」において、平野眞一総長による講義「名古屋大学運営の基本姿勢—これからの名大—」が行われる。
- 6月14日 宮内庁書陵部より資料照会、回答。
坂公恭名誉教授より、前所属研究所蔵の資料を受贈。
- 6月21日 財団法人西秋奨学会山本幸江氏より資料受贈。
- 6月23日 堀田室員、「大人数対象の全学教養科目の開講に向けての研究会」に出席。
- 6月24日 広報プラザの大型液晶モニターでスライドショー「名古屋大学のあゆみ」上映開始。
- 7月15日 加藤室長、山口室員、卒業生八田昭平氏宅を訪問し、資料受贈につき協議。八田氏、資料室見学のため来室。
- 7月25日 山口室員、堀田室員、理学部物理学科所蔵資料と坂田記念史料室を視察。
大学院工学研究科篠田剛研究室を訪問し資料受贈。
- 7月26日 山口室員、堀田室員、八田昭平氏宅を訪問し資料受贈につき協議。
- 7月30日 大学文書資料室の新ウェブページ公開。

○昨年につづき、全学教養科目「名大の歴史をたどる」で 平野総長が講義、「これからの名大」を語る

昨年度、本ニュース第17号でも報じましたように、大学文書資料室が開講する全学教養科目「名大の歴史をたどる」では、平野眞一総長がその中の1コマを「名古屋大学の法人化と展開」のテーマで担当しました。

これが学生に大好評であったことをうけて、今年度も平野総長に講義を依頼し、その快諾を得て実現の運びとなりました。講義は6月7日第2限に、経済学部第2講義室にて行われました。200人の教室がほぼ満員となり、学生の関心の高さがうかがわれます。マスコミも昨年に続いてこの講義に注目し、複数の新聞が翌日の朝刊で報道しました。

講義のテーマは、「名古屋大学運営の基本姿勢—これからの名大—」です。内容は、今年1月31日に公表された、法人化後における名大の基本方針である「名古屋大学の基本姿勢」をテキストに、これを学生むけに分かりやすく説明するものです。講義後のアンケートをみると、学生たちは法人化後の名大が置かれた状況の理解を深め、「学生も大学の構成員である」との総長の言葉に、大学生活への考えを新たにしました。

また総長は、自身の学生時代の苦悩や、素晴らしい教官との出会いなどについて語り、確かなところぞしと希望をもって、あきらめずに勉学や研究を続けることの大切さをうたえました。これにも学生は強い感銘を受けたようです。

なお、当日聴講できなかった学生からも強い関心が寄せられたことから、この講義の模様をDVD化しました。誰でも附属図書館で視聴することができるようになっています。



名古屋大学大学文書資料室ニュース 第19号
Nagoya University Archives News No. 19

名古屋大学大学文書資料室

室長 加藤 鉦治 (教授・併任)
専任室員 山口 拓史
堀田 慎一郎
専門職員 坪井 直志
事務員 増田 よしみ

発行日 2005年9月30日 (年2回刊)

編集
発行

名古屋大学大学文書資料室

名古屋市千種区不老町〒464-8601

電話：(052) 789-2046

FAX：(052) 788-6222

E-mail: nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp

印刷

株式会社荒川印刷

名古屋市中区千代田2-16-38